

新移民の社会統合と脱領域的な主体の構築

—シンガポールにおけるプラナカン概念をめぐって

安里陽子

<要旨>

多民族国家といわれるシンガポールは、イギリスによる海峡植民地時代からグローバル・シティ化した今日にいたるまで、つねに複数の異なる文化が存在する場所である。近年シンガポールでは、経済のグローバル化にともない増加する新移民と時を同じくするように「プラナカン (Peranakan)」文化が注目を集めている。本稿は、シンガポールにおけるプラナカン概念に焦点を当て、もともと国家という枠組みに当てはまらない存在であるプラナカンという主体が、いかに相互交渉的に構築されてきたのかを明らかにすることを目的とする。

プラナカンという概念にはさまざまな解釈が存在し、そもそもきっちり定義づけられるものではない。一般的にはシンガポールやマレーシア、インドネシアにおいて、プラナカン (Peranakan) という語はマレー語やインドネシア語で「子ども (anak)」を意味する言葉から派生したといわれ、地元の人と外国人とのインターマリッジ (通婚) による子孫を指すといわれる。またプラナカンと呼ばれるのは、外国人男性と地元の女性とのインターマリッジによる子孫である。本稿では、プラナカン概念は従来言及されているように混血性や異種混濁性を所与としたものではなく、海峡植民地における華人系移民の増加や植民地政府の統治政策によって可変的なものであることを考察した。その結果、プラナカンは海峡植民地時代においては他の華人系移民と自らを差別化して英国臣民であることを主張、プラナカン性を文化の領域に抱え込んだ。そして日本軍占領期やイギリス植民地支配からの独立に際しては、プラナカンは政治的に不可視化された存在となったことが明らかとなった。

プラナカンは、戦後若干の空白期間を経て、1980年代後半になるとシンガポールだけでなくマレーシアのペナンやマラッカのプラナカン協会と連動して共同体意識を高め、シンガポール社会で再び存在感を示していくようになる。さらに、経済成長著しい1990年代以降、シンガポールでプラナカン文化はブームとなっていくが、そこには

キーワード：プラナカン、外来性、多文化主義、移民、社会統合
 ASATO Yoko 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程/日本学術振興会特別
 研究員 DC asatoyoko@gmail.com

政府の力と、背景にある社会の動きがかかわっていたのである。プラナカン文化は、2008年にマレーシアのマラッカおよびペナン（ジョージタウン）が世界遺産に登録され、プラナカン博物館がオープンするなど、シンガポールでも観光やメディアで頻繁に取り上げられるようになっていく。プラナカン文化は消費文化化され、プラナカンの名乗る人々が増大したほか、やがてプラナカン文化は磁場を持つようになりポピュラー・カルチャー化することで国外へますます広がっていった。こうして複数の磁場を持つプラナカンは越境的なネットワークを持つにいたったのである。

シンガポールにはCMIO分類（華人系、マレー系、インド系、その他）による人口の管理にもとづく多文化主義が存在するが、プラナカンはCMIO分類に含まれない。それゆえプラナカン概念は状況可変的な概念となったのである。プラナカン概念は多文化主義を標榜するシンガポールという国家を融解させていく可能性をもはらんでおり、それは文化というかたちで多義的な政治性を生み出していくことにつながる。このように見てくると、プラナカンのように多義的な概念は政治化されつつ、主体との相互作用を通じて脱政治化される。

I はじめに

多民族国家といわれるシンガポールは、イギリスによる海峡植民地時代からグローバル・シティ化した今日にいたるまで、つねに複数の異なる文化が存在する場所である。プラット（Mary Louise Pratt）は、植民地支配など権力関係によって生じた、異文化が出会う空間を「コンタクト・ゾーン」と表現したが〔Pratt 1992:4〕、シンガポールはつねにコンタクト・ゾーンであり続けているといえる。

近年シンガポールでは、経済のグローバル化にともない増加する新移民と時を同じくするかのように「プラナカン（Peranakan）」文化が注目を集めている。プラナカンとは、文化的なアイデンティティを持つ共同体であり、混血性、異種混血性といった概念が含有されていると一般的には理解されている。しかし、歴史を紐解くと社会経済的、あるいは政治的な文脈におけるさまざまな概念が構築されてきたといえる。結論を先取りすれば、シンガポールにおけるプラナカン概念は、海峡植民地時代においては植民地権力や中国とのかわりにおける国家権力によって、グローバル・シティと化した現代においてはグローバル資本と国家権力によって、たえず複数の権力の絡まり合いの中で構築されてきたのである。本稿ではプラナカン概念をまず歴史の変容の中で検討し、次にグローバル化の中で拡大する新移民を国民国家に統合する際、そこにいかなる意味が付与されるのかを考えたい。本稿の目的は、シンガポールにおける1990年以後のプラナカン概念の変容を分析し、それが新移民の増加と密接に結びついていることを明らかにすることである。

以下、本稿の概略を述べる。II章では、プラナカンという概念がどのように構築されてきたのか議論する。後述するがプラナカン概念は領域横断的でありシンガポール独自の

「人種」主義を前提とした CMIO 分類¹の枠におさまらないため、新移民が増加する中、社会統合におけるコードとして扱われるようになると考えられる。それを議論するために、まず II 章でプラナカン概念がどのように構築されてきたのかということを整理しながら論じる。

続く III 章では、II 章で整理した先行研究によるプラナカン概念も含めて批判的に論じながら、1990 年代以降の経済成長の中でプラナカンが新移民の社会統合においてどのように位置づけられるかを描き出したい。その際、注目を集めるようになったプラナカン文化に着目し、シンガポールにおいてプラナカン概念が社会統合のコードとして作用しているのではないかと、それはシンガポールがグローバル・シティへと発展していくプロセスとかがかかわっているのではないかと、ということについて議論する。

シンガポールでは CMIO 分類によって人口が管理されており、CMIO 分類はシンガポールにおける多文化主義の象徴ともなっているのだが、そこにプラナカンがどのようにかかわるか検討するうえでチュア (Chua, Beng Huat) の議論が重要になってくる。チュアはプラナカンについて直接言及しているわけではないが、シンガポールがグローバル・シティとなっていく中、経済的格差や貧困の問題を「人種」ごとの文化の領域に押し込めることにより社会統合を図る策略である [Chua 2007: 924] として、CMIO 分類にもとづくシンガポールの多文化主義を批判している。プラナカンとは、ある特定の集団を指す概念として構築されてきた面もあるが、シンガポールが国家となっていく際には、特定の集団としての存在が見えなくなる概念であるといえる。

II プラナカン概念の構築と歴史

1 プラナカンとは

1-1 交易都市マラッカと華人

本章では、プラナカン概念が一般的にどのように定義され、語られているのか、先行研究を踏まえて記述していく。シンガポールにおけるプラナカン概念がいかに歴史的あるいは社会的に構築されてきたものであるかを次章で論じるため、その土台となる議論をまずここで整理しておきたい。

東南アジアは中国南部の海港と 7～8 世紀から交易関係にあったが、14 世紀末に誕生したマラッカ王国は、1 世紀以上にわたってマラッカ海峡を支配して交易の中心として繁栄し、華人の商人をはじめ多様な人々が居住するコスモポリタンな都市国家であった [田中 2002: 23]。マラッカ王国滅亡後、1641 年にはオランダ東インド会社がマラッカを獲得することとなった。1824 年には英蘭協約によりオランダがイギリスへマラッカを割譲、マラッカ海峡を境に東をイギリス、西をオランダが領有することになり、マレー半島は以後英領マラヤと呼ばれることとなる。イギリス東インド会社は、東南アジア進出の最初の

1 シンガポールのすべての国民、永住権取得者、外国人労働者を「華人系 (Chinese)、マレー系 (Malays)、インド系 (Indians)、その他 (Others)」の 4 つのエスニック・グループに分類して管理するという、シンガポール独自の「人種」主義を前提とした 4 分類のことを指す。

拠点としてペナンに港を建設、ペナンはやがて移民が集まり交易都市となったが、よりよい拠点を求め1819年にシンガポールに港を開いた。そして1826年、イギリス東インド会社はペナン・マラッカ・シンガポールを海峡植民地とし、シンガポールはその拠点となった。シンガポールは周辺からさらに移民を吸収し、華人移民の数も急激に増加していったのである [Tan 1993 : 32 ; 田中 2002 : 23-26 ; 奥村 2009 : 304-305]。このように、マラッカには海峡植民地となるはるか以前より華人が居住している歴史があり、その子孫がババ (Baba、男性を指す)、ニョニヤ (Nyonya、女性を指す) あるいはプラナカンと呼ばれるグループを形成するようになったといわれている [田中 2002 : 19-24 ; 田村 2000 : 36]。

プラナカン (Peranakan) という語はマレー語やインドネシア語で「子ども (anak)」を意味する言葉から派生したといわれ、地元の人と外国人とのインターマリッジ (通婚) による子孫を指すといわれる [Suryadinata 2010 : 2 ; Henderson 2003 : 30-31]。プラナカンはマレー諸島においてババ・ニョニヤとも呼ばれ、ババ・マレー語という福建語とマレー語の混合言語を話し、多くの人は英語も話す。さらに他の華人系と比べ、日常生活においてマレー文化に同化しているといわれている [Tan 1993 : 1 ; 田中 2002 : 24]。またプラナカンと呼ばれるのは、外国人男性と地元の女性との通婚による子孫であり、逆のパターンである地元の男性と外国人女性の場合の子孫は、男性側の共同体、つまり地元であるマレー社会やインドネシア社会に吸収され、マレー人あるいはインドネシア人としてのアイデンティティを持つと考えられている [Tan 1993 : 1 ; 田中 2002 : 24]。したがってプラナカンとは必ずしも華人系であるとは限らずアラブ系プラナカン、インド系プラナカンなどさまざまなパターンが存在し、現地の人と外国の人との混血による子孫という意味において、プラナカンはシンガポールやマレーシア、インドネシアに限らずフィリピンやタイにも見られる現象である [Suryadinata 2007 : 112-113]²。ちなみにマレー社会のプラナカンは華人系が多いことから、プラナカンといえば一般的に華人系プラナカン (Peranakan Chinese) のことを指している。

プラナカンは先行研究において上記のように定義づけられ、混血性や異種混濁性を所与のものとする概念として言及されてきた。しかし歴史を再考すると社会経済的、あるいは政治的な文脈においてさまざまなプラナカン概念が構築されてきたのであり、そうしたいわばプラナカン概念にまつわる政治性というものは、従来のようにプラナカン概念を一枚岩で、あるいは本質的なものとしてとらえると説明ができない。プラナカン概念は植民地権力や国家権力が強く働いて構築されると同時に、文化のかたちをとることによって脱国家的な動きも生じさせているのではないだろうか。

2 フィリピンではプラナカンという語ではなくメスティソ (mestizo) という語が使われており、また華人系というよりフィリピン人としてのアイデンティティを持っているといわれる。これに対し宮原暁は、今日の意味においての中国系メスティソは中国系移民の下位カテゴリーとされることが多いとし、「このようなメスティソの両義性、境界性からは、チャイニーズ・ディアスポラへの合流といった再中国化の動きも、逆に居住地社会への統合といった現地化、クレオール化、あるいはプラナカン化の動きもどちらも生じ得る」と論じている [宮原 2010]。

1-2 プラナカンとババ・ニョニヤ、海峡華人

先述したように、マラッカには海峡植民地となるはるか以前から華人が居住しており、その子孫がババ・ニョニヤあるいはプラナカンと呼ばれるグループを形成するようになったといわれる〔田中 2002 : 19-24 ; 田村 2000 : 36〕。マラッカのプラナカンは「移民後の長い歴史のなかで、中国とのつながりを失い、マレー語と福建語の混合した独特の言語（ババ・マレー語）を話し、衣食住の全般にわたってクレオール化した」〔田中 2002 : 24〕といわれるが、これらの特徴はプラナカンとそうではない華人系を区別する標識となっている。では、プラナカンと他の華人系は、どのような契機において互いを区別するようになったのであろうか。

マラッカに同化した華人たちが自らと他の華人とを異なる存在として認識するようになったのは、19世紀になって中国から大量の労働移民がやってきたことに起因するといわれる。その当時ババと呼ばれるグループは、海峡植民地において裕福な商人や実業家となっていたほか植民地エリート層として活躍するなど、地位や名声を確立した存在となっており、マラヤ諸州における鉱山やゴム農園の労働者としてやってきた「新客 (sinkheh)」あるいは新移民と呼ばれた中国人との違いを意識するようになったとされる〔Tan 1993 : 22 ; 田中 2002 : 25-26〕。そして、現地生まれの華人系であるババと、中国生まれの新客あるいは新移民とを区別するようになったことから両者の間に境界が形成され、さらには同じ現地生まれでもババとそうではない華人系との間にも互いを区別する意識が広がっていったとされている〔Tan 1993 : 22〕。ここにおいて、ババという語には海峡植民地における実業家やエリート層といった地位や立場、また言語、宗教、服装、食習慣などにおいて中国のそれらとは異なっている標識が含まれており、ババという語が階級やアイデンティティ、文化的な側面において華人系の中のある特殊なグループを指していることがわかる。

プラナカン、ババ・ニョニヤ、海峡華人など、似たような概念を持つ語は複数存在しているが、それらの相違点については以下のような指摘もある。スーリヤディナタは、「華人系プラナカン (プラナカン・チャイニーズ)」という語に対し、ババという語はたとえば言語や食習慣、服装などの特徴を共有する、華人系の中における特定の集団を指す語であるとし、しかもその特徴は現在失われつつあるものであるとしている〔Suryadinata 2010 : 4〕。また、以前はババと華人系プラナカンは同じような意味で使われていたが、いまではババという語は歴史的な文脈において華人系のある特定の集団を指す際に使われているという。さらに、シンガポールとマレーシアの華人系プラナカンの中には、プラナカンと呼ばれるよりもババ・ニョニヤと呼ばれたいと主張する人々がおり、それはプラナカンという語がババ・ニョニヤの特徴を無視して「現地生まれの華人」まで含んでしまうような大雑把な概念であるからとしている〔Suryadinata 2010 : 4〕。プラナカンはマレー語で「現地生まれの人々」を指すことから、マレーシアやシンガポール、インドネシアにおいては現地生まれの華人をその他の華人系と区別する共通の語として用いられている〔Clammer 1980 : 3〕という見方もあるが、「現地生まれ」というくくりだけではババ・ニョニヤの特徴を無視してしまう可能性もはらんでいるといえる。

シンガポールやマレーシアにおける華人系は、まず海峡生まれか中国生まれかで区別され、海峡生まれの華人はさらにある言語や習慣上における特徴を有しているかどうかでババ、あるいは海峡華人と呼ばれる。プラナカンという語は、クラマーやスーリャディナタ、タン・チーベンらの論考によると海峡生まれの華人とほぼ同義で使われており、ババという語はプラナカンや海峡華人と比べると言語や食、服装といった習慣上の特徴に焦点を当てているといえるが、現在においてはそういった特徴は失われつつあるというニュアンスが含まれている言説もあることに注意しておきたい。海峡華人という語は、「海峡華人英国臣民協会 (Straits Chinese British Association: SCBA)」という組織名にもあるように、英国臣民であることと深くかかわっている。これについては、次節において引き続き考察していく。また、プラナカンという語はシンガポール、マレーシア、インドネシアで広く使われ、共通の概念が含まれているが、地域によって、あるいは時代や状況によって含まれる意味は変化するものであり、またプラナカンと称される人々も変わってくることも着目しておきたい。さらにいえば、プラナカンという概念をめぐるこのようにさまざまな語がオーバーラップしていることが重要なのである。つまり、プラナカンとはある一つの集団や領域に還元できるものではなく、歴史的な背景によって構築されたものだけといえる。

2 海峡華人英国臣民協会の設立と追放令

この節では、海峡植民地となったシンガポールにおいてプラナカンが1900年にSCBAという組織を設立した経緯と、その契機となった追放令を中心に見ていきたい。またそれは、海峡植民地となってから労働移民が急増し華人系がマジョリティとなる中で、プラナカンの立場がどのように変化していくのかということにも深くかかわってくるのである。

先述したようにシンガポールは1826年、マラッカとペナンとともにイギリス東インド会社の海峡植民地となり、1867年にはイギリス本国の直轄植民地となった。またマレー半島各地もイギリスの支配下に置かれるようになり、スズ鉱山やゴム農園など大規模なプランテーション開発が行われた。そのため大量の労働者が必要となったことから、イギリス政府はインドや中国からの労働移民を奨励し、中国南部の福建、広東、潮州やインド南部、マレー半島からも大勢の労働者が押し寄せることとなったのである〔岩崎 1996 : 15-17 ; 田村 2000 : 32-33〕。マレー半島の開発とともにシンガポールは貿易・商業都市として急速に発展し、貿易や商業、港湾・建設労働、家事手伝いなどさまざまな職業に就く移民が増大した〔岩崎 1996 : 15-17 ; 田村 2000 : 32-33〕。

シンガポールは労働移民が激増したことにより人口も増大し、1824年には総人口1万700人でマレー系が60パーセントを占めていたが、1901年には総人口22万人、1931年には55万人を超え、うち華人系が75パーセント、マレー系12パーセント、インド系9パーセントと今日のシンガポールと同様なエスニック・グループ別の人口構成となった〔田村 2000 : 30-34〕。シンガポールでマジョリティとなった中国系のほとんどは「苦力」といわれる貧しい労働者で、教育レベルも低く、契約期間が終了すれば中国へ帰国する

「華僑」であったが、1930年代からは定住する者も増えていった。やがてこの移民集団は福建や広東、潮州、客家、海南など出生地ごとに「幫 (pang)」と呼ばれるネットワークとその法人組織である「會館 (huey kuan)」を形成するようになっていく [田村 2000 : 35-36]。同郷人同士の社会的・経済的な相互協力体制を持つ幫は、福建語や広東語など出生地ごとに言語が異なりコミュニケーションが難しかった労働移民にとって不可欠な存在であった [田村 2000 : 36]。

このように、祖国における出生地別に強いネットワークで結ばれていた新客が海峡植民地における華人系人口の大部分を占めていたのに対し、プラナカン³は華人系人口の15パーセントを超えることはなかったとされる [Suryadinata 2007 : 117]。プラナカンは数の上では少数派であったが、英語教育を受けて植民地政府の行政職や事務職、医師、弁護士、エンジニア、欧米系大企業の管理職や事務職といった職業に就いており、新客とは違って社会的に中流以上の階級に属する者が多かった [岩崎 1996 : 24-28 ; 田中 2002 : 31]。やがてシンガポールの華人社会においては、華人系も財力を持つようになり幫が力を持ち始めるようになったことから、プラナカンは自らの地位や植民地政府との深いつながりを維持するため1900年にSCBAを設立したといわれている。いっぽう幫もさらに拡大し、1906年には清朝政府の指示によって幫の連合体である中華総商会在シンガポールで設立されている [田中 2002 : 32-33]。

このように先行研究においては、SCBAが設立されたのは幫の組織化と発展に対抗し、プラナカンの利益や権利を守るためであるというのが一般的な解釈である [田村 2000 : 39]。これはSCBAの名称にも表れているように、会員は海峡植民地生まれの華人に限定されており、さらに海峡華人がイギリスの国籍を付与された英国臣民であったことにも起因した見方であるといえよう。だが、英国籍を有していることにともなう特権は日常生活においてはほとんどないに等しかったうえ、帰化することによって英国籍を取得することもできたことから、実際に帰化して英国臣民となった新客も多かったという [篠崎 2001 : 80]。そうすると、SCBAにおいて生まれながらの英国臣民であることを主張する必然性はどこにあったのであろうかという疑問も生じるが、出生による英国籍保持者と帰化による者とを区別し、後者は外国籍保持者と同等に扱われるという法律が一つだけ存在していたのである [篠崎 2001 : 80-81]。それが、海峡植民地からの「追放」を命ずる「追放令 (Banishment Ordinance)」であった。

追放令は、当初は治安維持法令の一条項であったのが、1888年には独立した「追放令」として発布された。この時点では、帰化による英国臣民は海峡植民地からの追放の対象にされる恐れがあったが、生まれながらの英国臣民である海峡華人は追放を免れる立場にあった。しかし1899年8月の改定によって、海峡華人は生まれながらに英国臣民ではない人々と同じ立場に突如置かれることとなり、富や権力の喪失どころか海峡植民地から追放され生活のすべてを失う危機に直面する恐れが生じたのである。さらにこの改定は、当時の植民地総督ミッツェルが植民地省大臣に対して書簡で提案したように、「イギリス領

3 プラナカンは華人系の人口の中に数えられているとしている。

で出生しても他の外国勢力からその国の臣民であると認識されているような人々」をすべて対象としたものであった。そしてそれは、まさに海峡華人を念頭においたものであったといえるのである [篠崎 2001: 82]。

植民地政府は、彼らのような海峡華人の英語教育エリートに対しても「新来移民の影響を受けやすく、中国に忠誠を抱き、海峡植民地政府に不信感を持っていると非難」しており、植民地支配者層と同等の地位につくことは許さなかった [篠崎 2001: 75-76]。植民地政府が海峡華人に対してこのような警戒心を抱いていたのは、海峡華人にも新客と同様に中国籍が与えられていたということが大きな要因になっていたと考えられる。当時、中国の国籍法では、中国系の祖先を持つ者には自動的に中国籍が付与されることになっていた [Chua 2001: 59-60]。このため、イギリスは属地主義の原則をとり二重国籍を認めていたにもかかわらず、改定された追放令では海峡華人が英国籍を持つようが植民地政府の判断に委ねられてしまう面が大きかったのである。

ここにきてシンガポールの海峡華人は生まれながらに英国臣民であることを強く主張するため、そうではない華人系と自らの立場との違いを明確にし「英国国籍所有者のみによる統合を最重要課題として共有するに至った」のであった [篠崎 2001: 87]。こうして SCBA は、英国籍を持つ華人のみに会員を限定し、800 人以上のメンバーで 1900 年 8 月に設立された [篠崎 2001: 77]。

SCBA の設立にあたって重要なことは、シンガポールにおけるプラナカンが一つのエスニック集団というアイデンティティによって自らを組織化したのではなく、植民地権力による追放令への自己防衛のために組織化したということである。さらにいえば、それは実態とまったくかけ離れた組織化ではなく、外からやってきて定住した人々であり植民地エリート層であるという意味においてゆるやかな共同体意識を持っていたプラナカンが、植民地権力による政治力学が働く中で自らを差異化していく必要性に迫られ、組織化したものであるということである。

SCBA は、英国臣民であること、植民地政府とイギリスへの忠誠をアピールする場として機能するようになり、1901 年にはシンガポール義勇軍に華人部隊を設立しようとする動きも実現させるなど、活動も活発になっていった [篠崎 2001: 85]。SCBA によってシンガポールのプラナカンは結束し、英国臣民としての立場も固めていくと同時に植民地政府との関係も深まっていったのである。そしてエリート層であるプラナカンの豊富な財力に裏打ちされた、絢爛豪華な文化も花開いていった。たとえば 12 日間にもわたる盛大なプラナカンスタイルの結婚式、ニョニヤたちが身にまとう繊細な刺繍が施されたクバヤ（ブラウス）に、思い思いの模様や色使いが美しいビーズ細工、手の込んだニョニヤ料理など、1930 年代まではプラナカン文化の黄金時代ともいわれた [Rudolph 1998: 226-252]。当時、プラナカンはイギリス人専用のクラブへの出入りも許可されるなど、さながら特権階級であった。いっぽう、それゆえに SCBA は裕福な海峡華人が集うサロンのな面も目立つようになっていったのである。

3 権力を失っていくプラナカン

前節で述べたように、追放令を機にシンガポールのプラナカンは団結し、SCBA の設立によってさらにその地位と権力を確固たるものにしていった。だが、その地位も権力も、太平洋戦争による日本軍の占領によって、大きく変わっていくことになる。本節では、1930 年以降、太平洋戦争、イギリスによる植民地支配からの独立、そして 1959 年におけるシンガポールの自治権確立と、時代の変化とともに大きく変わっていくプラナカン概念と組織とのかかわりについて見ていきたい。

戦前期のシンガポールにおいて、プラナカンは植民地政府やヨーロッパ系企業関連のビジネス、弁護士や医師などの専門職に就くなど、イギリスによる支配によって生活が成り立っているといえるような状況にあり、いわば親英派 (pro-British) であった。プラナカンの多くは英語教育を受けた英語派華人であり、海峡植民地においてはその英語力を生かしてエリート層となり西洋化したライフスタイルを送っていたが、日本軍による統治時代を迎え、その生活は大きく一変する。

シンガポールでは 1942 年 2 月 15 日から 3 年半におよぶ日本軍政が始まった。日本軍は 1931 年の満州侵略開始後、中国側の抵抗に苦しみ、いっぽうで東南アジアの華僑・華人が中国救済のための募金活動などを幅広く展開していたことから、華僑・華人系に対してもっとも残酷な行動をとった。シンガポールにおいては華僑・華人の「粛清」を行い、さらに軍事費の一部を賄うため「5000 万海峡ドル献金」を華僑・華人に対して強制したのである [田村 2000 : 49 ; 岩崎 1996 : 38-39]。ここにおいてプラナカンは、日本軍からは他の華人系と区別されることなく扱われ、英語を話すことからイギリス軍の協力者とみなされた [岩崎 1996 : 38-41]。日本軍統治時代に粛清にあったプラナカンは多く、さらに強制献金によりこれまで蓄えてきた富や財を手放さざるを得なかった者も多かったことから、それまでの裕福な生活は激変した。

話は日本軍統治前に少しだけさかのぼるが、中国救済の募金活動をめぐってプラナカンの政治的な立場というものが植民地政府に誤解されかねないような事態が生じていた。当時、プラナカンの中には華語や中国文学、歴史への関心が高い者も多く、また満州事変による犠牲者を救援したいという思いから実際に寄付を行った者も多かったが、あくまでもそれは文化的で人道主義的な関心から生じたものであったとされる。しかしプラナカンのこのような行動が、中国に対して政治的に忠誠心を抱いているという印象をイギリス側に与えてしまうこととなったのである [Chua 2001 : 62]。そこでプラナカンは「マラヤにおける自らの政治的立場を危険にさらさないようにするために、中国的なものに対する文化的な関心には、政治的な意図はない、ということを繰り返し強調した」 [Chua 2001 : 62] のである。チュア・アイリン (Chua, Ai Lin) は、「海峡華人にとって、中国的なものに対する文化的関心と大英帝国への愛国心とは矛盾するものではなく、中国、イギリス両方に忠誠心を抱くことは可能である」と考えられていたと述べている [Chua 2001 : 63]。このように、プラナカンは中国籍、英国籍と二重国籍を保持しており、SCBA のメンバーとして親英派をアピールしていたにもかかわらず、中国への救済活動にもかかわらず、中国への忠誠心を抱いていると見られてしまうことになったのである。プ

ラナカンにとってみれば文化的関心と政治的忠誠心は別のものであると考えていたとしても、シンガポールが政治的な緊張状態に置かれている時には誤解されてしまう、あるいはプラナカンが両義的な面を内包しているがゆえにゆらぎが生じてしまい、自らの立場を主張せざるを得ないという状況に置かれてしまうことになるのである。つまりは、植民地政府からの弾圧を避けるために、中国への支援はあくまでも文化的な活動として行ったものであると言いきったのである。

戦争が終わり、日本軍が撤退するとシンガポールにはイギリス軍が戻ってくるようになった。イギリスは1948年2月にマレー半島9つの州とマラッカ、ペナンを合わせた「マラヤ連合」（現在のマレーシア）を発足させ、シンガポールのみ切り離して直轄植民地にするとした〔岩崎1996:55;田村2000:57-59〕。同年、イギリスはシンガポールの植民地運営を円滑に進めていくため、総督の諮問機関であるシンガポール立法評議会に民選議員を加えるとした〔田村2000:61〕。その選挙に向けてSCBAはシンガポール進歩党（Singapore Progressive Party）を結成した。シンガポール進歩党はメンバーを海峡華人以外の人々にも広げたが⁴、中国生まれの中国人に市民権を付与することに反対していたこと、そして植民地政府に近いために保守派とみなされたことなどから、大衆の支持を得ることはできなかった。これに対し、戦後シンガポールやマレーシアからイギリスに留学していた海峡華人で、英語教育を受けた若手のリー・クアンユー（のちシンガポール初代首相、Lee Kuan Yew: 李光耀）らが中心となって1954年1月に人民行動党（People's Action Party: PAP）を結成した〔田村2000:83-84〕。PAPは進歩党と違い、英語派のエリートと華語派エリートが協力して結成し、創立メンバーには親英派のみならず共産系の労働組合活動家なども顔をそろえていた。1957年にはマレーシアがイギリスから独立、1958年にシンガポールは自治州となり自治権が付与され、1959年には自治政府選出のための総選挙が初めて行われた〔岩崎1996:57〕。PAPはマラヤ連邦への統合によって植民地から独立することなどを掲げ、自治権獲得に向けた1959年の選挙において圧勝し、今日にいたるまで政権与党として君臨している。

話をSCBAに少し戻そう。SCBA会長のオン（T. W. Ong）氏は、1948年の選挙で進歩党が支持を得られなかったことから、ババら英語派華人だけでなくすべての海峡生まれの華人が団結すべきであると語り、さらに1948年の時とは情勢が大きく変化していることからSCBAは政治にかかわるべきではないという意見が組織内でも高くなっていると述べている⁵。結局SCBAは、候補者を出さず、政治には参加しなかったのである。

PAPが圧勝した1959年は、SCBAという組織と、そのメンバーであるプラナカンにとって大きな転換点となった。プラナカンはイギリス植民地時代、SCBAを組織し植民地政府の恩恵を受け、特権階級のような存在であったが、それゆえPAP政権になってからはすべてが一変してしまったのである。PAPはシンガポールで大多数を占める華語派華人の支持を得るため、親英的で英語教育を受けたSCBAメンバーのプラナカンに恩恵を

4 SCBAも1950年代からは会員資格について、英語を話せず華語やマレー語しか話せない海峡生まれの華人、そして女性にも広げている。

5 “The Babas Must Decide: Will We Go into Politics?”, *The Straits Times*, 27 May 1955, 8.

与えなかった。PAPの創設メンバーらも英語教育を受けたプラナカンであったにもかかわらず、である。英語派、親英といった意識が内在化されている多くのパパ、そしてニョニヤにとって、PAP政権になったことは政治的のみならず文化的にも自らの存在価値が貶められてしまったと感じる結果となったのである [Rudolph 1998: 202]。

やがてシンガポールとマレーシアは1963年に合併したが、政策の大きな相違によりシンガポールは1965年にマレーシアから分離・独立されることになった。SCBAはこのめまぐるしい変化の中、いっさい政治に参加することはなかった。政権に就いたPAPの幹部たちもプラナカンではあったが、SCBAとは距離をとった。さらに、リー・クアンユーは自らについて、プラナカンと呼ばれたくないと語っている⁶。リーは、プラナカンによるSCBAの政治は植民地政府寄りの古くさいスタイルであり、英語派華人であるプラナカンという立場ではシンガポールでマジョリティの華語派華人から支持を得られないとして、プラナカン性を打ち出す政治からは徹底的に距離を置いたのである。リーを筆頭とするPAPの姿勢に対し、プラナカンである地方議員からは、いまのマラヤの土台をつくったのはプラナカンであり、現地生まれという意味においてプラナカンもマラヤ人 (Malayan) も変わりなく、プラナカンも新しい国造りのための政治に参加させるべきだとする意見も出されていた⁷。しかしPAPの勢いは止まらず、SCBAは政治とは無関係の組織として再出発すべく、組織名を1964年に「シンガポール華人プラナカン協会 (Singapore Chinese Peranakan Association)」と改称し、1966年には「プラナカン協会 (the Peranakan Association)」と改めた。組織の目的も、シンガポール共和国の利益のため、また「人種間 ('inter-racial') の調和」や共通のナショナル・アイデンティティの創出などを強調するようになった [Rudolph 1998: 202]。このように1959年以降、プラナカンは政治の表舞台からは降り、自らの存在をそれまでのように主張することなく、なるべく目立たないようにふるまうようになっていく。

PAPが政権をとるようになり、またシンガポールも独立国家となっていくうえで、かつてプラナカンが他者との差異化を図りSCBAを組織する際の指標となった、植民地エリートであり英国臣民であるということは新しいシンガポール社会においては不必要な、意味をなさないものとなっていくのである。

III 社会統合装置としてのプラナカン概念

1 博物館化とポピュラー・カルチャー化

プラナカンは前章で述べたように、太平洋戦争やシンガポールの独立期における華人に対する反発と、英国植民地支配層に対する反発、さらには旧エリート層であったことに対する民衆からの反発という三重の意味で反発されることとなった。いわば、シンガポールが植民地から独立国家となっていく中で、植民地エリートや英国臣民であり、外とのつな

6 "Let Peranakans Help in Building Malayan Nation", *The Singapore Free Press*, 4 September 1959, 3.

7 "Let Peranakans Help in Building Malayan Nation", *The Singapore Free Press*, 4 September 1959, 3.

がりを持つプラナカンは、その特性ゆえに国民国家を形成していく際においては阻害物となってしまうのである。

しばらくの空白期間を経て、1980年代後半になるとプラナカンはシンガポール社会で再び存在感を示していくようになる。さらに、経済成長著しい1980年代以降、シンガポールでプラナカン文化がブームとなっていくが、そこには政府の力と背景にある社会の動きがかかわっていたのである。とくに2002年に、当時のゴー・チョクトン（Goh Chok Tong; 吳作棟）首相が「各エスニック集団はそれぞれのエスニック・センターを持つべきだ」と主張したこと〔奥村 2009: 202〕は重要な意味を持つ。それはいわば政府主導でエスニック・アイデンティティを推進する主張であり、その後国家遺産局（National Heritage Board: NHB）とシンガポール観光局（Singapore Tourism Board: STB）が連携して、おもなエスニック・グループのヘリテージセンターが次々と設立されていく。チャイニーズ・ヘリテージ・センター（華裔館）のみ1995年にすでに設立されていたが、プラナカンはシンガポールのおもなエスニック・グループとして認知されていたわけではなく、2008年にプラナカン博物館（Peranakan Museum）がオープンしたことは特筆すべきである。

プラナカン文化は、2008年にマレーシアのマラッカおよびペナン（ジョージタウン）が世界遺産に登録されると、シンガポールでも観光やメディアで頻繁に取り上げられるようになる。「プラナカン文化に触れる旅」といった趣旨の観光ツアーも多数生み出され、新聞紙面での広告も急増した。先述のプラナカン博物館のオープンや、とくに2008年のプラナカンをテーマにしたテレビドラマ「リトル・ニョニヤ（The Little Nyonya: 華語では小娘惹）」の大ヒットにより、プラナカン文化への関心が一気に高まりブームとなった。「リトル・ニョニヤ」は1930年代から70年後の現代までのマラッカ、ペナン、シンガポールを舞台に、親子2代のニョニヤの人生を軸に展開していくメロドラマで、「シンガポール版『おしん』」ともいえるものである。プラナカン料理や陶磁器、サロン・クバヤやビーズシューズといった、ドラマに登場した1930年代の華やかで洗練されたプラナカン文化は視聴者を魅了した。そしてプラナカン文化は消費文化化され、プラナカンを名乗る人々が増大することにつながった。それはたとえばビーズシューズを履いてみたりすることから始まるが、プラナカンを名乗りたがるのは、シンガポリアンはみんな何らかのプラナカンといえるのではないか、ということと、プラナカンである、あるいはプラナカンと名乗ることが「かっこいい」からではないか、という見方がある〔Phin 2009: 30〕。この現象は、シンガポールやマラッカ、ペナン以外でもプラナカン協会が誕生するという時期とも重なっている。マレーシアのクアラ・ルンプールとセランゲーン、クランタン、タイのプーケット、オーストラリアのメルボルンとシドニーにもそれぞれ協会が誕生した。やがてプラナカン文化は磁場を持つようになりポピュラー・カルチャー化することで国外へますます広がっていった。こうして複数の磁場を持つプラナカンは越境的なネットワークを持つにいたったのである。

しかし、このようにポピュラーになって登場するようになったプラナカン文化に関してシンガポール・プラナカン協会会長のピーター・ウィー（Peter Wee）氏は「私は50年

前、80年前のプラナカン文化については語れるけれども、いまのものは語れない。プラナカン文化のオリジナルは過去のものであって、現在のものは創造され、新しい解釈によるものであると思う⁸と語っている。では「オリジナルな」、「真正な」プラナカン文化は、どこに存在しているのだろうか。プラナカン博物館には「オリジナル」なものが展示されており、「本物の」プラナカン文化に触れることができるのだろうか。以下、このプラナカン博物館に焦点を当て、プラナカン博物館が表象しているものと期待されている役割について議論する。

プラナカン博物館は、アジア文明博物館 (Asian Civilisations Museum) の別館というかたちで NHB の運営下のもと、プラナカン文化に特化した博物館として 2008 年 4 月にオープンした。シンガポールのみならず東南アジアのプラナカン文化を一堂に集めた博物館として、世界有数の所蔵品を誇る⁹。3 階建の建物には 10 のギャラリーが設けられており、結婚式や葬式の様子、あるいは道教や仏教、祖先崇拜などが融合した宗教観、食べ物、ニョニヤが作ったビーズ細工、サロン・クバヤ、陶磁器といったように、テーマごとにギャラリーを分けた展示がなされている。展示されている品々は、シンガポールやマレーシアのプラナカンが実際に使っていた家具や陶磁器、サロン・クバヤなどであり、個人の寄付や寄贈によって集められたものばかりだ。そういう意味においては、「真正な」といったキーワードにぴったり当てはまり、また 12 日間にもおよぶ結婚式のように、現在ではほとんど残っていない風習の様子も目にすることができることから、展示されているのは過去のプラナカン文化であるともいえる。

しかしながら、シンガポール政府所管の博物館は静的な、過去のを展示するという場所だけにとどまらない。プラナカン博物館では、タッチパネルで各ギャラリーの詳細な情報が得られるようになっていたほか、ニョニヤたちが電話でおしゃべりした会話を聴くことができる仕掛けがあり、サロン・クバヤを着る体験もできるなど、インタラクティブな工夫が随所に盛り込まれている。またさまざまな言語によるガイドツアーを毎日開催するなど、来館者を飽きさせない工夫が随所にみられる。これは博物館を単に歴史や文化を学ぶ場所とするのではなく、その建物やプログラムを楽しむための目的地として位置づけるといふ、NHB のチーフ・エグゼクティブ・オフィサーであるマイケル・コー (Michael Koh) 氏が 2006 年に都市再開発事業団 (Urban Redevelopment Authority: URA) から NHB へ移籍して以来取り組んでいることである。NHB は所管の博物館を「モデルチェンジ (reinvent)」するため、マーケティングを行い、さまざまなプログラムを開発するなど奔走し、その結果来館者を 2006 年の 100 万人から 2007 年には 170 万人に、2008 年には 250 万人に、大幅に増加させることに成功した [Wong 2009: 8]。また、こうした NHB の動きは海外からの投資にも大きく支えられている。プラナカン博物館に設置されたタッチパネルなどのマルチメディア関連器具のほか、台所や結婚式の様子を再現した展示は、JP モルガン投資銀行 (JPMorgan Chase) の資金によって実現できたものである

8 ピーター・ウィー氏へのインタビューから (2012 年 3 月 7 日)。

9 プラナカン博物館ビジターガイド (日本語版)。2012 年 9 月現在、英語、日本語、中国語、韓国語版が発行されている。

[Karon 2008: 58]。

こうしたインタラクティブな仕掛けはもちろんだが、プラナカン博物館でもっとも興味深いのは、入ってすぐの場所にあるギャラリー1の展示である。そこは他のギャラリーとは性質が異なっており、モノが展示されているのではなく、顔写真が壁一面に展示されているというのが非常に印象的である。その顔写真はどれも「プラナカン」を名乗る人々のものであり、「福建系プラナカン (Hokkien Peranakan)」、「インド系プラナカン (Chitty Peranakan)」、「西スマトラ、ジャワ系プラナカン (West Sumatran and Javanese Peranakan)」など、それぞれ自らの名乗り方とともに展示されている。表記は統一されていないにしても、いや、だからこそ自らのプラナカン・アイデンティティを表現しているといえる。ギャラリー1は、ポートレートに囲まれて顔写真を1点ずつ眺めていくうちに、眺める人自身も何らかのプラナカンではないか、と感じさせるような力を持っている。

「プラナカン・ポートレート (Peranakan Portraits)」というこの展示の説明書きには、「プラナカンコミュニティの顔は、シンガポールや東南アジアの多様性の鏡である」と始まり、「これらのポートレートのテーマは、混血の祖先を持つ人々というだけではなく、多様な文化遺産を表現し、称賛しているのであり、それはプラナカンであってもなくても共有できて楽しめるような、私たちすべての遺産なのである」¹⁰という文章が記されている。プラナカン博物館は、プラナカン文化をシンガポールのみならず広く世界へ発信するという目的はもちろん、シンガポリアンに向けて、あるいは訪れた人すべてに向けてプラナカン概念というものをとらえ直してもらうことにより、多様な人々で構成され、多様な文化が共存している状態こそがシンガポールの文化である、と発信しているかのようである。それはプラナカン博物館のオープニングセレモニーにおけるシンガポールのリー・シェンロン (Lee Hsien Loong: 李顯龍、リー・クアンユーの長男) 首相のスピーチにも見出すことができる。リー・シェンロン首相は、プラナカン博物館オープンに関する記事がインターナショナル・ヘラルド・トリビューン紙に掲載されたことでプラナカン文化やプラナカン博物館が国際的に認知されるようになるのは重要であり、シンガポールが単なるマーケットプレイスではなく、文化的にも特徴のあるグローバル・シティであると示していくことができると述べている [Zul 2008: 8]。

シンガポール政府は、アートと文化のグローバルな発信に力を入れるようになっており、2009年にはNHB管轄の博物館から初めて西洋の主要美術館へコレクションを展示することになったが、その展示品こそが「カムチェン (Kamcheng)」というプラナカンの陶磁器であった [Mayo 2009: 36]。洗練され、かつクオリティも高いプラナカンの品々は、シンガポールが世界に向けて文化を発信する際に、シンガポールが誇る文化として用いられることになったのである。あるいは、こう考えることができるかもしれない。シンガポールを代表する伝統文化として、華人系、マレー系、インド系いずれかのものだけをとりあげるのは政治的に難しいが、プラナカンのものであればうまくパワーバランスもと

10 引用者訳。

ることができる、と。さらにいえば、多文化主義を国是として掲げ、多文化主義がナショナル・アイデンティティを構築しているとするシンガポールでは、プラナカン概念が持つ異種混雑性、混血性というものが、統合のシンボルとしても作用しているのではないだろうか。それは先ほど紹介したリー・シェンロン首相によるオープニング・スピーチで述べられた、「シンガポリアンに文化的で豊かな生活と、われわれのヘリテージと歴史に誇りを持つ心を育み、ナショナル・アイデンティティを強く持つようになることが、このプラナカン博物館の役割でもある」[Zul 2008 : 8]ということにもつながっている。

プラナカン博物館は、クリフォード (James Clifford) がいうように、ある意味において「第三世界諸国が彼らのアートを第一世界の地で展示することによって、世界的な承認を得ることや投資家の目を引くこと」[クリフォード 2002 : 233] に成功したともいえる。そして、プラナカン文化はいわゆる「第三世界諸国のアート」というものが指し示しているような文化とはまた異なるものであり、イギリスや中国の影響が色濃く反映された、非常に洗練されたものであるのも興味深い。

プラナカン博物館がオープンしたことにより、プラナカン文化はシンガポール国内でも、そして海外でも認知されはじめている。クリフォードは「^{コンタクト・ゾーン}接触領域としてのミュージアム」において、次のように述べている。

私がこれまであつかつてきたさまざまな接触領域は、遺産のポストモダンのマーケティングにかかわっているし、文化あるいはアートを通してアイデンティティを展示することにも関与している。そして、客体化された伝統や道徳的・美学的に解釈された価値、市場性の高い商品といった、文化のミュージアム構造がますます拡大していることはまちがいない [クリフォード 2002 : 250]。

プラナカン博物館の成功、プラナカン文化の認知度の高まりは、NHB などシンガポール政府の取り組みによるところも大きいだが、同時にマーケットともうまくリンクすることによりシンガポールのナショナル・アイデンティティの醸成にも結び付いている。換言すれば、プラナカン文化はシンガポールにおいて社会統合のシンボルとして作用すると同時に、外に向かって広がってもいるのではないだろうか。シンガポール政府の取り組みと、社会統合装置が必要となるシンガポール社会については、次節以降で詳しく見ていくことにしたい。

2 経済成長とともに増加する外国人労働者と新移民

シンガポールは 1965 年の独立から 1970 年代までは労働集約型産業を中心に外資系企業の誘致を進め、人件費の安価な外国人労働者を導入することで経済発展を遂げてきた。当初は労働力の伝統的供給国であるマレーシアから労働者を導入し、その後、非伝統的供給国であるタイ、スリランカ、インド、バングラデシュ、フィリピンなどからの労働者も受け入れるようになった [経済産業省 2008 : 157]。1980 年代後半以降シンガポール経済が飛躍的に発展すると、より多くの労働者が必要とされた [Ortmann 2009 : 30]。政府は建

設労働者や家事労働者などの非（未）熟練労働者、いわゆる単純労働者に加え、高学歴で専門職に従事する優秀な人材を世界中から獲得する取り組みもスタートさせた。高度人材の獲得競争はすでにグローバル規模で繰り広げられていたことから、シンガポール政府は積極的に永住権や市民権（国籍）を付与するなど、単純労働者との待遇の違いを明確に打ち出して誘致活動に力を入れた。

シンガポールでは、外国人労働者数や永住権取得者数、国籍取得者数などの統計資料すべてが公開されているわけではない。ここでは、1980年以降の永住権および国籍取得者数の推移（表1）と、2007年から2011年におけるその推移（表2）、1990年以降の人口における永住権および国籍取得者の数（Singapore Residents）とそれ以外の人数（Non-Residents）の推移（表3）を見ていくことにしよう。

永住権取得者は1990年代に入り大きく伸び、2008年の79,167人をピークに減少しているとはいえ、年間27,000人以上は存在する。国籍取得者はそれほど大きな変化は見られないものの、2007年以降の5年間だけでも毎年15,000人以上いることがわかる。つまり、この5年間でシンガポールには新移民が毎年42,000人以上は増加しているということができ、ピーク時の2008年には99,680人も新移民が増加しているのである。ちなみにシンガポール国民の出生数（Citizen births）は2007年が32,361人、2008年は32,423人、2009年が31,842人、2010年は30,131人、2011年には30,946人と毎年30,000人を少し上回る程度であることから¹¹、毎年生まれるシンガポール国民の数よりも新移民の数のほうが大きく上回っているということになる。

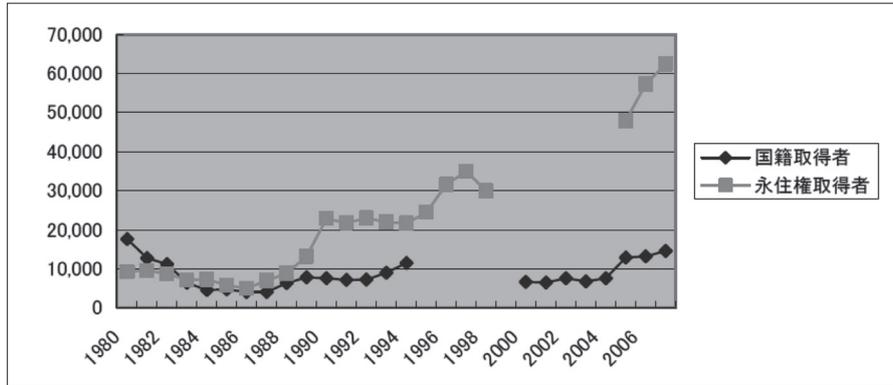
表3にある非定住者（Non-Residents）とは、いわゆる単純労働に従事する非熟練または未熟練の外国人労働者（Work Permit Holders）や、雇用契約期間の定められている専門職または熟練労働者である外国人労働者（Employment Holders または S Pass Holders）、あるいは留学生などを指す [Saw 2012 : 18]。その内訳については触れられていないが、2012年版には内訳を大まかに紹介したグラフが掲載されている。それによれば、2012年6月時点におけるシンガポールの総人口は約531万人、うち非定住者は149万人であり、その内訳は雇用許可証を持つ外国人労働者（Work Permit Holders、ここでは家事労働者は除き別途算出されている）が46パーセント、外国人家事労働者（Foreign Domestic Workers）が13パーセントを占めている¹²。表3によると総人口の中でも非定住者の増加が著しいことから、シンガポールにおける外国人労働者の占める割合はかなり高いということが推察できる。

上記の統計資料から、新移民と外国人労働者の増加率はシンガポール国民の増加率よりもかなり高いことが明らかであり、とくに1990年以降の増加が顕著である。「シンガポールは多くの高度人材と底辺の労働者を外国に依拠しながらグローバルな競争に勝ち残ろうとしている」 [経済産業省 2008 : 161] ということができ、新移民や外国人労働者の総人口に占める割合が高い状態は今後も避けられないであろう。それゆえに、社会統合ということが課題であり続けるのである。

11 Department of Statistics Singapore, *Population in Brief* 2008-2012 各年版 .

12 Department of Statistics Singapore 2012, *Population in Brief* 2012, 5.

表1 シンガポールにおける永住権および国籍取得者数の推移 (人)



(出典：経済産業省 2008、197 頁)

※グラフが途切れている箇所は統計局や新聞報道などにおいても統計資料を得られなかったことを示す。

表2 シンガポールにおける永住権および国籍取得者数の推移 (2007-2011 年)

年	永住権取得者数 (人) Persons Granted Permanent Residency	国籍取得者数 (人) Persons Granted Singapore Citizenship
2007	63,627	17,334
2008	79,167	20,513
2009	59,460	19,928
2010	29,265	18,758
2011	27,521	15,777

(出所：Department of Statistics Singapore, *Population in Brief* 2008-2012 各年版)

表3 シンガポールにおける人口の推移 (単位：1,000 人)

年	総人口 Total Population	定住者 Singapore Residents			非定住者 Non-Residents
		小計 Total	国籍取得者 Singapore Citizens	永住権取得者 Singapore Permanent Residents	
1980	2,413.9	2,282.1	N/A	N/A	N/A
1990	3,047.1	2,735.9	2,623.7	112.1	311.3
2000	4,027.9	3,273.4	2,985.9	287.5	754.5
2004	4,166.7	3,413.3	3,057.1	356.2	753.4
2005	4,265.8	3,467.8	3,081.0	386.8	797.9
2006	4,401.4	3,525.9	3,107.9	418.0	875.5
2007	4,588.6	3,583.1	3,133.8	449.2	1,005.5
2008	4,839.4	3,642.7	3,164.4	478.2	1,196.7
2009	4,987.6	3,733.9	3,200.7	533.2	1,253.7
2010	5,076.7	3,771.7	3,230.7	541.0	1,305.0
2011	5,183.7	3,789.3	3,257.2	532.0	1,394.4

(出所：Department of Statistics Singapore, *Yearbook of Statistics Singapore* 2001, 2010, 2012 年版)

3 CMIO 分類と多文化主義

ここでは、シンガポールの多文化主義¹³とエスニック・アイデンティティの関係について考察する。シンガポールでは、経済の発展が最重要課題であった時期においては多文化主義のもとエスニシティが「封印」[田村 2000:185]されてきた。だが経済成長を遂げ「アジア的価値」[田村 2000:241]が導入されることになり¹⁴、1980年代以降「華」への回帰¹⁵が図られていくようになると、エスニック・グループ間の差異化が進み、バランスに変化が生じていった。まず、シンガポールの多文化主義とはどのようなものなのかということから考えてみたい。

シンガポールは独立以来、多文化主義を国是としているが、それはCMIO分類と密接にかかわっているのが大きな特徴である。シンガポールにおける多文化主義とは、「複合社会の住民を構成すると見なされるさまざまな『人種』の文化及びエスニック・アイデンティティに平等な地位を与えるというイデオロギーのことである」¹⁶[Benjamin 1976:115]と同時に、「多人種のイデオロギーは、住民が『人種』という一つの特定の配列に分割されるよう限定するのに役立つというものである」ということである[Benjamin 1976:115]という定義がなされている。つまりシンガポールの多文化主義は、CMIOで分類されるエスニック・グループそれぞれが平等であるとしてひとくくりにする方向性と、CMIOそれぞれの違いを明確にする差異化の方向性という、相反する2つの方向性が内包されているということができる。

はじめに前者の「すべてのエスニック・グループを平等に扱う」イデオロギーについて考えてみよう。これはシンガポールという国家の成り立ちに深くかかわっているものであり、隣国マレーシアとの関係、そして中国との距離感を保つために編み出されたともいえる。1965年の独立から1970年代後半までは、各エスニシティを「封印」することで治安の安定を図り、経済成長に邁進することが国家建設における重要課題であった[Ortmann 2009:27]。多文化主義はメリトクラシーとともに、そのために必要な価値として打ち出され、「生き残りのイデオロギー (Ideology for Survival)」として強調された[田村 2000:163]。さらに多文化主義のもと政府は二言語政策を実施し、英語国家への誘導を図ることで多数派である華語派華人の台頭を抑えることに成功した[田村 2000:185-187]。英語の普及は外資の導入をもたらしただけでなく、それぞれの言語で国民が分断されていた状態に終止符を打つという結果をももたらした[田村 2000:191]。

このように、各エスニック・グループに平等な地位を与えるというイデオロギーは、シンガポールならではの多文化主義としてうまく機能し、エスニック・アイデンティティを

13 シンガポールでは「多人種主義 (multiracialism)」という語が用いられているが、本稿では田村慶子 [2000:165] や奥村みさ [2009:154] が用いているように「多文化主義 (multiculturalism)」とした。

14 おもに1980年代以降に進められた。1979年開始の「スピーク・マンダリン」キャンペーン、「国民共有価値 (Shared Values)」(1991年)による儒教的な価値観の普及など。

15 前述の「スピーク・マンダリン」キャンペーンをはじめ、儒教的価値観の導入などにより、シンガポールがそれまで排除してきた「華」の属性とされるものへの回帰を図ったことをいう。中国との経済的つながりを強化するねらいのほか、シンガポール国民の大多数を占める華語派華人の不満を埋めることでPAP政府への支持を期待する意図があった[田中 2002:144-145; 田村 2000:269]。

16 訳は鍋倉 [2011:97] による。

「シンガポリアン」というアイデンティティのサブカテゴリーとして位置づけることにより、ナショナル・アイデンティティを育むことにもつながったといえる。しかし多文化主義のイデオロギーは、1979年にスタートした「スピーク・マンダリン」キャンペーンに象徴されるように「華」への回帰が図られたことによって、各エスニシティを差異化する方向へ進んでいくことになる。換言すると、多文化主義は「人々の行動が、より華人になるような圧力の下に華人を置き、よりインド人になるような圧力の下にインド人を置き、よりマレー人になるような圧力の下にマレー人を置く」[Benjamin 1976: 124] という面をますます濃くしていったのである。各エスニック・グループは互いにステレオタイプ化したイメージを抱くようになり、エスニック・グループ間の境界の維持につながりだけでなく、同じグループ内においても緊張関係や問題が引き起こされることにもなった [Lai 1995: 185]。

CMIO分類により、エスニック・グループがいずれかのカテゴリーに押し込められてしまうということは、エスニック・アイデンティティは政府によって操作可能なものとして考えられていることを示している。アンダーソン (Benedict Anderson) は、次のように述べている。

(人口調査の分類、下位分類には、あのこっけいな「その他」と命名された箱があり、これが現実生活のあらゆる不規則性をすばらしき官僚的立体画でおおいかくす。) またこの考え方の「横糸」はシリーズ化ともいべきもの、つまり、世界は複製可能な複数からなるという前提である。特定のものはつねにあるシリーズを暫定的に表現しているにすぎず、またそうしたものとして扱われる。植民地国家がいかなる中国人よりもまえに「中国人」のシリーズを想像し、いかなる国民主義者も登場するまえに国民主義者のシリーズを想像したのはこのためであった [アンダーソン 2007: 299-300]。

アンダーソンが述べるように、シンガポールでは CMIO のカテゴリー内においてもそれぞれ「その他」が設けられており、たとえば華人系のカテゴリーには福建人 (Hokkiens)、潮州人 (Teochews)、広東人 (Cantonese) などを例に挙げたあと、最後にその他 (etc.) と記されている (表 4)。また、CMIO 分類はエスニシティを「文化横断的なプロセス、たとえば文化の借用や交換、あるいは CMI のいずれでもない文化の発展を受け入れるものではなく、それらを混合したものとなる」[Lai 1995: 185] ととらえる傾向にある。

シンガポールでは、たとえば日系アメリカ人、というような名乗りは人口統計上許されていない。これはシンガポールにおいて「メスティーソ、混血人」は人口統計の「カテゴリーとして消滅した」[白石 2000: 101] ことによるものである。たとえば『マレー人』と『中国人』の混血について考えたとき、そこには『マレー人二分の一、中国人二分の一』『マレー人四分の一、中国人四分の三』『マレー人八分の一、中国人八分の七』などのカテゴリーがあるはずである [白石 2000: 101-102] のだが、シンガポールの人口統計で

表4 2000年と2010年のセンサスにおける用語の定義（抜粋）

（変更のあった箇所は太字で表記）

エスニック／方言集団 (Ethnic / Dialect Group)		
	2000年	2010年
	エスニック集団は、人の人種 (a person's race) を指す。混血者は、父親のエスニック集団によって分類される。人口は、次の4つのカテゴリーに分類される。	エスニック集団は、人の人種 (a person's race) を指す。自己申告によるものである。人口は、次の4つのカテゴリーに分類される。
華人	中国起源の者 (persons of Chinese origin) を指す。福建人、潮州人、広東人、客家人、海南人、閩北人、福州人、興化人、上海人等。	中国起源の者 (persons of Chinese origin) を指す。福建人、潮州人、広東人、客家人、海南人、閩北人、福州人、興化人、上海人等。
マレー人	マレーないしインドネシア起源の者 (persons of Malay or Indonesian origin) を指す。ジャワ人、ボヤニ人、ブギス人等。	マレーないしインドネシア起源の者 (persons of Malay or Indonesian origin) を指す。ジャワ人、ボヤニ人、ブギス人等。
インド人	インド、パキスタン、バングラディッシュ、スリランカ起源の者 (persons of Indian, Pakistani, Bangladeshi or Sri Lankan origin) を指す。タミル人、マラヤリ人、パンジャビ人、ベンガル人、シンハラ人等。	インド、パキスタン、バングラディッシュ、スリランカ起源の者 (persons of Indian, Pakistani, Bangladeshi or Sri Lankan origin) を指す。タミル人、マラヤリ人、パンジャビ人、ベンガル人、シンハラ人等。
その他	華人、マレー人、インド人以外のすべての者を指す。ユーラシア人、白人、アラブ人、日本人等。	華人、マレー人、インド人以外のすべての者を指す。ユーラシア人、ヨーロッパ人、アラブ人、日本人等。

(出所: Department of Statistics Singapore, 2000: 16; 2010: ,169) 2000年の日本語訳は鍋倉 [2011:43] に依拠した。

は、いまでもそれはありえないことなのである。

プラナカンは、インターマリッジ¹⁷や華人性という概念とともに語られることが多いが、シンガポールにおいてはCMIOいずれかのカテゴリーに定められた位置があるというわけではない。シンガポール統計局によると、シンガポールでは、プラナカンは自らが属しているエスニック・グループによって華人系、マレー系、インド系、その他のいずれにも属性を申告することができる¹⁸。これは、プラナカンと同じように外国人男性と地元女性の通婚による子孫とされる「ユーラシアン (Eurasian)」がCMIO分類において「その他」と位置づけられている状況とは大きく異なっている。ユーラシアンはポルトガル系、オランダ系などヨーロッパ系との通婚による子孫 [奥村 2009: 72] とされるのに対し、プラナカンは華人系が数の上では圧倒的に多いとはいえインド系もいることから、より異種混血的に扱われているといえることができる。

17 ここでは、先述のように異なる「人種」間の通婚のみならず、たとえばシンガポールにおける華人系プラナカンと華人系シンガポーリアンの婚姻のように、「人種」的には同じ華人系でありながらも異なる集団に属する者同士の婚姻を含むことから、単に「通婚」とするのではなく「インターマリッジ」と表記した。

18 シンガポール統計局職員へのインタビューから (2012年9月)。プラナカンはCMIOのどれに分類されるのか質問したところ、統計局職員から以下の回答を得た。
「われわれの公式な人口統計では、個人の属するエスニック・グループは、調査や行政的手続きにおいても、自己申告に基づいたものです。シンガポールでは、プラナカンは自身が属するエスニック・グループによって、華人系、インド系、マレー系あるいはその他、と申告することができます。」

In our official population statistics, individuals' ethnic group is based on self-declaration either via survey or administrative processes. In Singapore, Peranakans can declare themselves as either Chinese, Indians, Malays or Others ethnicity, depending on their ethnic group.

1965年の独立以降、多文化主義を掲げて「華」を排除してきたシンガポール政府は、1970年代後半になって「華」への回帰を図っていくが、そこには1979年に中国と経済協定を結び、「他の東南アジア諸国と比べて対中経済関係を有利に進める」[田村 2000: 241-242]というねらいがあった。その後1990年代には「アジア的価値」がシンガポール社会においてますます重要視されていくようになり、シンガポールがグローバル・シティ化するにつれて「華」化が進んでいった。各エスニック・グループはその地位において平等であるというシンガポールの「神話」ともいべき多文化主義は、しだいに変容していったということができる。また、華人系の出生率が減少する中、人口の約4分の3はつねに華人系が占めるという状態を保つために、外国人労働者や新移民の多くを香港や中国から受け入れたのである [Chua 2003: 69]。こうしたあからさまな華人系の優遇は、華人系とマレー系やインド系との間に摩擦を引き起こすことにつながった [Chua 2003: 69]。また、華人系の中でも、高等教育を受けた英語力の高いグループとそうではないグループの収入格差が顕著になるなど、教育面や経済面における格差が問題となっていた。これに対し政府は、エスニック・グループ同士の対立が生じる可能性を恐れて「人種排外主義 (Racial chauvinism)」として厳しく取り締まるいっぽう、「人種間の調和 (Racial harmony)」というイデオロギーを打ち出し、多文化主義を公的に保護しようと努めたのである [Chua 2007: 917]。

このような問題は各エスニック・グループで解決していこうと、各グループの自助組織 (Self-Help Organizations) が1990年代初めに相次いで設立されたが、それは政府が社会福祉予算を抑えるためだけでなく、貧困問題や経済問題を各エスニック・グループ固有の「文化」の問題であるとすり替えることで、リベラルな民主主義が勃興するのを予防する目的があった [Chua 2007: 924]。チュアによれば、それはPAP政府が文化の領域に政治を押し込めた最初の策略であるとする [Chua 2007: 924]。さらにそれは各エスニック・グループを差異化し、CMIO分類を固定化させることにつながるが、「人種的調和」をうたうことによって、シンガポールの多文化主義を損なうことなくPAPの統治が継続していくのである。

4 新移民を包摂するプラナカン概念

シンガポールにおける多文化主義は、CMIO分類という各エスニック・グループを差異化する考え方とつねに隣り合わせにあるということができる。先述したように、1980年代以降シンガポールでは「華」化が強力に進められ、各エスニック・グループ間の調和を乱すことになりかねない状況をももたらした。またシンガポールがグローバル・シティとなっていくのにもとない各エスニック・グループ間の格差が広がっただけでなく、外国人労働者や新移民の増加により国民の雇用が脅かされる危険性も生じている。そして、外国人労働者や新移民の多くは中国の出身であり華人系以外の国民から強い反発があるのはもちろん、華人系の人々には、新移民と自らを差異化させようという動きも生じている。

シンガポール政府にとって外国人労働者や新移民は労働力として不可欠であり、受け入れをストップさせるわけにはいかないことから、上記の事態が生じていることは由々し

き問題である。プラナカン概念の再構築にはこうしたモーメントが絡み合っているのではないか。象徴的な出来事が『ザ・プラナカン』¹⁹に掲載されているので取り上げてみたい。2012年6月10日にプラナカン博物館で開催された「ストレーツ・ファミリー・デー (Straits Family Day)」という新規国籍取得者 (New Singapore Citizens) 向けのイベントで、シンガポール・プラナカン協会から役員のチャン氏 (Baba Chan Eng Thai) が出席しプレゼンテーションを行っている。下記は、チャン氏自らがプレゼンテーションに関する報告をまとめた『ザ・プラナカン』の記事の一部である。

シンガポールの新規国籍取得者で埋めつくされた部屋で、私はまず、プラナカンもかつては新シンガポリアンであり、祖先の多くは中国からマラヤ、シンガポールに移民してきた人たちであるという話をした。また、1880年代から1960年代までの、プラナカンのライフスタイルや料理、工芸品などの写真も紹介した。プラナカンは植民地時代からシンガポールが独立し華語を「母語」として学ばなければならなくなるまでは、シンガポールにおいて脚光を浴びた存在であった。

参加者は、シンガポール初期のリーダーの多くはプラナカンであることを学んだ。リム・ブンケン (Lim Boon Keng: 林文慶) やソン・オンシアン (Song Ong Siang: 宋旺相) ら海峡植民地時代の知識人や、シンガポール初代大統領のリー・クアンユー、初代財務大臣のゴー・ケンスィー (Goh Keng Swee: 呉慶瑞)、元大統領のウィー・キム・ウィー (Wee Kim Wee: 黄金輝) らがそうである。さらに現首相のリー・シェンロンや現大統領のトニー・タン (Tony Tan: 陳慶炎) もプラナカンである。

プラナカンが大部分はチャイニーズであり続けながらもマレー文化や西洋文化のさまざまな影響を慣習に取り入れてきたように、新規国籍取得者のみなさんも多文化社会シンガポールで居場所を見つけてほしい、とエールを贈った [Chan 2012: 31]。

参加者である新規国籍取得者の大多数は、中国からの新移民であることが推察できる。チャン氏はプレゼンテーションにおいてプラナカン概念の持つ華人性を強調しつつも、もともとはプラナカンも移民であることに触れ、いわば旧移民であるプラナカンと新移民はともにシンガポリアンなのであると述べている。ここにおいて、プラナカン概念は新移民をシンガポール社会に統合するコードとして作用しているということが出来る。さらに、プラナカン概念によって新移民の社会統合を図るということは、新移民とプラナカンが重なることにつながるのである。

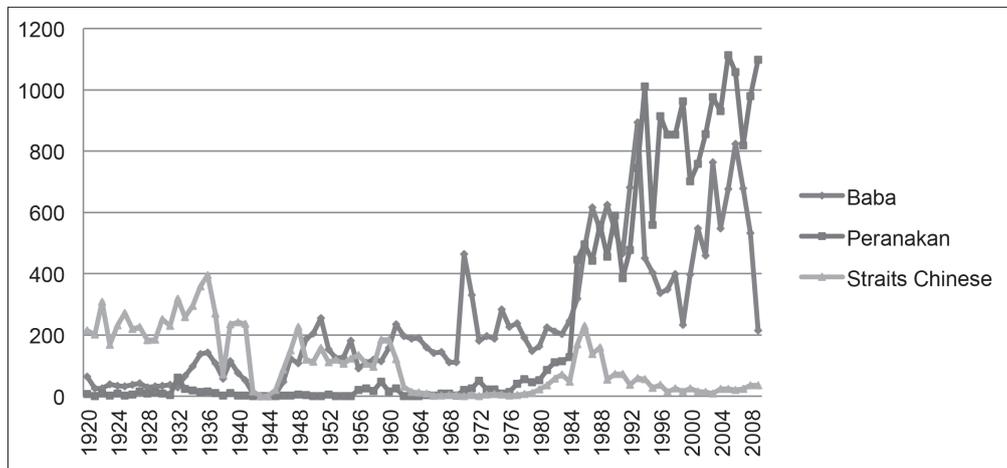
プラナカン＝シンガポリアンであるという語りは、過去にも何度か登場している。まず1990年前後の事例から見てみよう。1988年には、当時シンガポール・プラナカン協会の会長であったオン氏による「すべてのシンガポリアンはプラナカンである」 [Rudolph 1988: 43] という発言があり、1990年にはババ・コンベンションにて外相や第二副首相な

19『ザ・プラナカン (The Peranakan)』はシンガポール・プラナカン協会のニュースレターで1994年6月に創刊、年4回発行されている。

どを務めたラージャラットナムが「ババ——：最初のシンガポーリアン (Baba: The First Singaporeans)」と題したスピーチを行い、「すべてのシンガポーリアンはババとしてこの国にルーツを持っている」と述べている²⁰。

さらにさかのぼって1959年には、リー・クアンユーの「プラナカンとは呼ばれたくない (‘that he would not like to be called a peranakan’)」という発言を受け、ソウ・ペック議員 (Seow Peck Leng) が次のように述べている。ソウは、プラナカンという語は最初にマレー人が現地生まれの華人のことを指して使ったものであるが、もともとプラナカンとは現地生まれの男性あるいは女性のことであり、マレー人とプラナカンの間に違いはないと語っている²¹。ここで再びシンガポールの英字紙において「プラナカン」「ババ」「海峡華人」という語がどのような時期に登場しているのか見ておこう。

表5 シンガポール英字紙における“Peranakan”、“Baba”、“Straits Chinese”の登場件数



(NewspapersSG における検索をもとに筆者作成。アクセス日：2012年12月17日)

シンガポールがイギリスの植民地支配から自治権を確立する1959年ごろまでは、「海峡華人 (Straits Chinese)」という語が多いことがわかる。これはイギリスの植民地だったということに関連しており、海峡植民地政府とのつながりを重視したことによると考えられる。その後1980年代半ばまでは「ババ (Baba)」が多く、1990年代に入ると「プラナカン (Peranakan)」が上回るようになる。1990年代以降は外国人労働者や新移民の増加が顕著になっていく時期であり、シンガポール社会への統合が課題となる時期でもある。プラナカンという語は海峡華人やババと比べると「現地生まれ」以外のニュアンスが薄いことから、この時期以降に多く登場するようになったと考えられる。また、前章において論じたように、1990年代以降はシンガポールにおいてプラナカン文化が注目されるようになる時期でもあることから、文化というかたちをとって頻繁に登場するようになったと考え

20 'A Singapore Viewpoint: Immortalising the Baba Culture' in *Suara Baba* (August 1991), 4.

21 "Let Peranakans Help in Building Malaysian Nation", *The Singapore Free Press*, 4 September 1959, 3.

られる。

上記のグラフを見ると、シンガポールという国家に大きな変化が生じた時を境にして、海峡華人という語からババ、そしてプラナカン、と使用される語も変化していることがわかる。さらに、1990年以降はプラナカンという語が多く使用されるようになったもののババもかなり使用されており、結果的にプラナカン、ババどちらも使用回数が大きく増加していることがわかる。プラナカン文化がポピュラー・カルチャー化することで新聞に登場する回数も大幅に増えたが、それは新移民の増大と時期的にリンクしており、脱政治化した文化概念という社会統合装置としてのプラナカン概念も広がっていったと考えられるのではないか。

本章では、プラナカン概念がシンガポールで増え続ける新移民を社会的に包摂するためのコードとして作用している点について議論した。シンガポールにはCMIO分類で人口を管理することにもとづく多文化主義が存在するが、プラナカンはCMIO分類に含まれない。したがって、状況依存的な可変的概念として恣意的に扱うことのできるものとなり、プラナカン概念は新移民を社会的に包摂するコードとして作用することができたのである。シンガポールがグローバル・シティへと成長する過程で多くの移民や外国人労働者が受け入れられ、多くの新シンガポリアンが誕生してきたが、この政策は当然のように労働市場での競合、不動産価格の高騰といった社会問題を引き起こしてきた。これを正当化するためにも移民国家であるシンガポールにおける新移民をプラナカンと同一化して扱ったのである。その意味において、プラナカンはシンガポールの多文化主義を体現する概念としても、その役割を果たしているということが出来る。

IV おわりに

プラナカン概念は、国家に大きな変化が生じる際に文化概念として再構築され、そのたびに新たな政治性を生み出してきたということが出来る。歴史を振り返ると、海峡植民地時代には、プラナカンは追放令に対応するためエリート層であり英国臣民であることを強く主張する必要があった。また中国との関わりを警戒する英国植民地政府の弾圧を避けるため、プラナカンによる中国支援はあくまでも文化的なものであると主張する戦略をとった。この時期、SCBAという組織に属するある特定の集団であるということが、プラナカンにとっては自己防衛かつ自己証明ともなっていたのである。

戦後、シンガポールが脱植民地化していくプロセスにおいては、エリートで英国臣民であるというプラナカンの立場は抑圧された。さらにはマジョリティである華語派華人の支持を得るために、異種混濁性や外来性というプラナカン概念も抑圧されることとなった。やがて経済発展にともない外国人労働者や新移民が増加すると、プラナカン概念は新移民を包摂するために再構築されることになる。

先述したように、海峡植民地時代に重要な意味を持っていたエリート性は、植民地政府との関係性においてSCBAの持つ特権階級意識やプラナカン文化のハイカルチャー的な側面に表象されていたといえる。シンガポールの独立後、エリート性は意味をなさなくな

り、国民国家を形成する中でプラナカンの持つ外とのつながりはむしろ抑圧されていった。やがてシンガポールがグローバル・シティとなり大量の新移民が入ってくるようになると、社会統合というモーメントにおいてプラナカンの持つ異種混雑性や外来性という概念が再び重要な意味を帯びはじめる。そしてそれは、ポピュラー・カルチャー化し、プラナカンが注目を集めるようになっていくことと関連しているのではない。

プラナカンは植民地時代においても独立国家となってからも、国民国家の形成においてつねに警戒される存在であるがゆえに、外来性や異種混雑性にまつわる外とのつながりは抑圧され、文化的に表象されるようになるのである。このように見てくると、プラナカンのように多義的な概念は政治化されつつ、主体との相互作用を通じて脱政治化される。シンガポールにおけるプラナカン概念は、脱政治化された文化として表象され、国家の社会統合において新移民を包摂するコードとなったが、それはポピュラー・カルチャーとなりシンガポールという国家を超えて広がりをもつものとなったのである。そして、海峡植民地時代にも、文化のかたち押し込められた政治性に関わる主体が存在していたように、シンガポールがグローバル・シティとなった現在、ポピュラー・カルチャーとなったプラナカン文化の広がりの中で、脱領域的な主体が生まれている可能性もあるのではない。

本稿ではプラナカンの持つ多義性をさまざまな角度から論じ、文化というかたちで政治が実践されることの意味について、シンガポールを事例に考察した。しかしそれはシンガポールだけにとどまるものではない。本稿でも触れたように、マレーシアやインドネシア、タイ、フィリピンなどさまざまな場所でプラナカン文化が根付いており、そのことによって何らかの政治的な空間が生じていることが考えられる。こうした動きは十分に考察することができなかったが、今後の課題としたい。

<追記>

本稿は、2013年に同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科に提出した修士論文『シンガポールにおけるアイデンティティ・ポリティクス——再構築されるプラナカン概念と文化をめぐる政治性』の一部を加筆・修正したものである。同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の先生方をはじめ院生、職員のみならず、とくに同研究科の富山一郎先生と研究会（火曜会）参加者のみなさま、そしてシンガポールで快くアドバイスをくださった関係者のみなさまに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

<参考文献>

- アンダーソン、ベネディクト 2007 『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、書籍工房早山。
- 岩崎育夫 1996 『リー・クアンユー——西洋とアジアのはざままで 現代アジアの肖像 15』岩波書店。
- 奥村みさ 2009 『文化資本としてのエスニシティ——シンガポールにおける文化的アイデンティティの模索』国際書院。

- クリフォード、ジェイムズ 2002 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝・有元健・柴山麻妃・島村奈生子・福住廉・遠藤水城訳、月曜社。
- 経済産業省 2008 『アジア諸国における外国人材の活用等に関する実態調査』。
- 篠崎香織 2001 「シンガポールの海峡華人と『追放令』——植民地秩序の構築と現地コミュニティの対応に関する一考察」『東南アジア——歴史と文化』30:72-97。
- 白石隆 2000 『海の帝国——アジアをどう考えるか』中公新書。
- 田中恭子 2002 『国家と移民——東南アジア華人世界の変容』名古屋大学出版会。
- 田村慶子 2000 『シンガポールの国家建設——ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー』明石書店。
- 鍋倉聰 2011 『シンガポール「多人種主義」の社会学——団地社会のエスニシティ』世界思想社。
- 宮原暁 2010 「フィリピン諸島における今日的な意味での中国系メスティソのトポロジー」『パネル2「国民であること・華人であること——20世紀東南アジアにおける秩序構築とプラナカン性」』東南アジア学会第83回研究大会発表資料。
- Benjamin, Geoffrey 1976 The Cultural Logic of Singapore's 'Multiracialism'. In *Singapore: Society in Transition*, Hassan Riaz ed. Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp.115-133.
- Baba Chan Eng Thai 2012 "Singapura Rumah Kita: Engaging New Citizens", in *The Peranakan* (Issue 3 2012), 30.
- Chua, Beng Huat 2003 Multiculturalism in Singapore: and Instrument of Social Control. *Race & Class* 44(3): 58-77.
- 2007 Political Culturalism, Representation and the People's Action Party of Singapore. *Democratization* 14(5): 911-927.
- Chua, Ai Lin 2001 *Negotiating National Identity: The English-Speaking Domiciled Communities in Singapore, 1930-1941*. MA Thesis, National University of Singapore.
- Clammer, John 1980 *Straits Chinese Society: Studies in the Sociology of the Baba Communities of Malaysia and Singapore*. Singapore: Singapore University Press.
- Henderson, J. 2003 Ethnic Heritage as a Tourist Attraction: the Peranakans of Singapore. *International Journal of Heritage Studies* 9(1): 27-44.
- Karon Ng 2008 "A History to Cherish", *The Straits Times*, 16 April 2008, p.58.
- Lai, Ah Eng 1995 *Meanings of Multiethnicity: A Case-Study of Ethnicity and Ethnic Relations in Singapore*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Mayo Martin 2009 "The Kamcheng Factor". *Today*, 16 May 2009, p.36.
- Ortmann, Stephan 2009 Singapore: The Politics of Inventing National Identity. *Journal of Current Southeast Asian Affairs* 4: 23-46.
- Phin, Wong 2009 "Who Wants to Be a Little Nyonya?". *Today*, 10 January 2009, p.30.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.

- Rudolph, Jurgen 1998 *Reconstructing Identities: A Social History of the Babas in Singapore*. Aldershot: Ashgate.
- Saw, Swee Hock 2012 *The Population of Singapore (Third Edition)*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies (ISEAS).
- Suryadinata, Leo 2007 *Understanding the Ethnic Chinese in Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- 2010 Introduction. In *Peranakan Chinese in a Globalizing Southeast Asia*, Leo Suryadinata ed. Singapore: Chinese Heritage Centre, pp.1-13.
- Tan, Chee Beng 1993 *Chinese Peranakan Heritage in Malaysia and Singapore*. Kuala Lumpur: Penerbit Fajar Bakti Sdn. Bhd..
- Tan, Eugene K. B. 2004 ‘We, the Citizens of Singapore…’: Multiethnicity, its Evolution and its Aberrations. In *Beyond Rituals and Riots: Ethnic Pluralism and Social Cohesion in Singapore*, Lai Ah Eng ed. Singapore: Eastern Universities Press, pp.65-97.
- Wong Kim Hoh 2009 “Using Heritage to Boost Bonds”, *The Straits Times*, 15 July 2009, p.8.
- Zul Othman 2008 “Peranakan Museum Making a Splash”. *Today*, 26 April 2008, p.8.

Department of Statistics Singapore, *Census of Population 2000 Statistical Release 1: Demographic Characteristics*

Department of Statistics Singapore, *Census of Population 2010 Statistical Release 1: Demographic Characteristics Education, Language and Religion*

Department of Statistics Singapore, *Population in Brief 2008-2012* 各年版

Department of Statistics Singapore, *Yearbook of Statistics Singapore 2001, 2010, 2012* 年版

Suara Baba (年刊会報), Penang: The Peranakan Associations in Malaysia and Singapore

The Peranakan (季刊会報), Singapore: The Peranakan Association Singapore

The Business Times (日刊紙), Singapore

The Singapore Free Press (日刊紙), Singapore ※1946年 The Straits Times に買収

The Straits Times (日刊紙), Singapore

Today (日刊紙), Singapore

インターネット資料

NewspapersSG (<http://newspapers.nl.sg/>) (最終アクセス日：2012年12月17日)

Social Integration and the Construction of Cross-Border Agents: The Peranakan Concept in Singapore

Yoko ASATO

Keywords: Peranakan, foreign origin, multiculturalism, immigrants, social integration

The purpose of this study is to clarify how the concept “Peranakan,” originally connoting an ethnic hybrid culture, included polysemous meanings in the process of nation building and the economic development of Singapore. Singapore has been a multiethnic space since it was under the British administration as Straits Settlements. Recently, with the growing number of new immigrants along with the economic globalization in Singapore, Peranakan culture has come to the fore and come to be popular culture. This paper proposes to describe how the Peranakan agent, which emerges through migration by cross-border persons, has been constructed in the process of mutual interaction and negotiation, focusing on the Peranakan concept in Singapore.

Peranakan is a controversial term, which has a variety of interpretations. It is said that the term “Peranakan” comes from a Malay/Indonesian word “anak,” which means “a child,” and generally refers to “the offspring of intermarriage between a native (Malay/Indonesian) female and a foreign male”. In this paper, the author investigated the definition of Peranakan and the dynamics of change in the definition across time. As a result, it can be said that the hybridity of the concept, widely regarded as given, varied according to the increase in the Chinese population and the policy of British colonial government. Peranakans came to claim themselves as British subjects under the colonial rules to protect and keep themselves as subjective agents in the sphere of culture. During Japanese occupation and independence from British colonialization, Peranakans had been invisible politically.

After this silence, Peranakans started to emerge in society again by strengthening community ties across the Straits of Malacca. Singapore experienced the Peranakan boom after the 1990s due to tourism policy, opening the Peranakan Museum as well as registering Malacca and George Town, Penang as UNESCO World Heritage Sites in 2008. Peranakan became a consumer culture and started to gain cohesiveness due to its popularity, and some people started to identify and state themselves as Peranakan. The popularity formed several magnets of Peranakan culture beyond Singapore, such as Penang and Malacca, with cross-border networks.

The Singapore government strictly enforces CMIO demographic policy, in which all Singaporeans are divided into one of the four categories; C (Chinese), M (Malays), I (Indians), or O (Others). Peranakan is the category of those who are not classified into CMIO demographics in Singapore. Therefore, Peranakan discourse can transcend policy. It means that Peranakan has the potential to disintegrate the nation-state of Singapore by advocating multiculturalism and to lead to an equivocal or alternative political sphere by taking the form of culture. As just described,

a polysemous concept like Peranakan is politicized on one hand and de-politicized on the other through interaction among agents.